



KAGAWA  
UNIVERSITY

香川大学留学生センター

# 日本語学研修プログラム報告書

(第1回～第10回)



1. はじめに (本報告書作成にあたって)	1
2. 各回の報告	2
2-1. 第1回	3
2-2. 第2回	9
2-3. 第3回	15
2-4. 第4回	18
2-5. 第5回	20
2-6. 第6回	27
2-7. 第7回	27
2-8. 第8回	31
2-9. 第9回	34
2-10. 第10回	37
3. 研修実施に係るデータ	41
3-1. 実施時期および期間	41
3-2. 参加学生	41
3-3. 担当教職員	42
3-4. 学外実習	42
3-5. 体験学習	43
3-6. ホストファミリー	43
4. ホストファミリーからのメッセージ	44
5. 元研修生からのメッセージ	53
6. 卒業生からのメッセージ	56
7. 終わりに (今後へ向けて)	57





# 目 次

1. はじめに（本報告書作成にあたって） .....	1
2. 各回の報告 .....	2
2-1. 第1回 .....	3
2-2. 第2回 .....	9
2-3. 第3回 .....	15
2-4. 第4回 .....	18
2-5. 第5回 .....	20
2-6. 第6回 .....	27
2-7. 第7回 .....	27
2-8. 第8回 .....	31
2-9. 第9回 .....	34
2-10. 第10回 .....	37
3. 研修実施に係るデータ .....	41
3-1. 実施時期および期間 .....	41
3-2. 参加学生 .....	41
3-3. 担当教職員 .....	42
3-4. 学外実習 .....	42
3-5. 体験学習 .....	43
3-6. ホストファミリー .....	43
4. ホストファミリーからのメッセージ .....	44
5. 元研修生からのメッセージ .....	53
6. 卒業生からのメッセージ .....	56
7. 終わりに（今後へ向けて） .....	57



## 1. はじめに（本報告書作成にあたって）

国立大学法人化を翌年に控えた2003（平成15）年4月、香川大学にも文部科学省省令施設として留学生センターが設置され、専任教員が2名配置された。翌年、専任教員がさらに2名加わり、法人化とともに留学生センターの活動も本格的に始動を開始した。

留学生センター設置3年目、法人化2年目の2005（平成16）年より、本センター独自の外国人学生受け入れプログラムとして開始したのが、2週間の日本語語学研修プログラムである。海外の大学で日本語を勉強中の学生に、香川の地で生きた日本語・日本文化・日本社会を体験してもらい、日本と香川を知ってもらい、そして、願わくばこの研修をきっかけとして本学へ正規の留学生として留学してもらいたいという、いわば「呼び水」的、「スタディーツアー」的なものとして計画・実施してきた。

初年度はプログラム名さえも固まっておらず、年2回夏と冬に実施という方針のもと、第1回は「夏季日本語語学研修プログラム」、第2回は「冬季日本語語学研修プログラム」と称したが、翌年より、「第〇回日本語語学研修プログラム」という名称に統一することとし、回を重ねてきた。そして、各方面の関係者のご協力も得て、実施回数も二桁を数えることとなったため、このたび、これまでの成果を一度形としてまとめ、反省と発展への糧とすべく、第10回までの記録を報告書として発行することとした次第である。

留学生センターとしての活動を展開し、語学研修プログラムも回を重ねる中では、プログラム期間を4週間に拡大してみたり、新たな専任教員が加わったり、留学生センターが「教育・学生支援機構」という機構の下に入ったり、機構を出て新設の「インターナショナルオフィス」の組織となったりと、さまざまな歴史があった。その中で、語学研修プログラムとして特筆すべき記憶として、二つのことが思い起こされる。一つは、一度プログラムに参加した後、母国で日本語学習に励み、日本語力を格段に伸ばして再度参加してくれた学生がいたこと、もう一つは、本プログラム参加後、正規留学生として本学に入学してくれた学生がいたことである。特に後者は、我々の意図し希望した目的の実現であり、感慨もひとしおであった。これ以外にも、本学での出会いがきっかけとなって、本学日本人学生がプログラム参加学生の国を訪ねて再会を果たしたり、参加学生とホストファミリーとの絆が続いていたり、我々教員が海外出張時に現地でかつての参加学生と再会できたりと、わずか数週間の香川での滞在が、さまざまな形で時間と国境を越えて広がっているのも嬉しい事実である。

我々の語学研修プログラムは、現在、第14回を終え、第15回に向けて準備が進められている。これからもこのプログラムを継続・発展させ、無事次号の報告書作成が迎えられるよう、教職員一同、心を一つにして邁進していきたい。関係の皆様方には、是非忌憚のないご意見ご指導をいただけたら幸いである。

2011（平成23）年3月

インターナショナルオフィス副オフィス長、留学生センター長      ロン・リム  
インターナショナルオフィス留学生センター（本報告書編集担当）      塩井実香

## 2. 各回の報告

第1回から第8回までの報告は、『香川大学留学生センター紀要』創刊号から第4号までの各号に掲載したものを、再録する。

第9回、第10回については、紀要等での報告はまだ行っていないため、本紙上で新たに報告を行う。

第1回から第8回までの報告の出典は、以下のとおりである。

- ・ 第1回…『留学生センター紀要』創刊号（2006年3月発行）59～66ページ
- ・ 第2回…『留学生センター紀要』創刊号（2006年3月発行）67～74ページ
- ・ 第3回…『留学生センター紀要』第2号（2007年3月発行）58～61ページ
- ・ 第4回…『留学生センター紀要』第2号（2007年3月発行）62～64ページ
- ・ 第5回…『留学生センター紀要』第2号（2007年3月発行）65～72ページ
- ・ 第6回…『留学生センター紀要』第3号（2008年4月発行）51ページ
- ・ 第7回…『留学生センター紀要』第3号（2008年4月発行）52～56ページ
- ・ 第8回…『留学生センター紀要』第4号（2009年1月発行）37～40ページ

なお、研修開始初年度の2回、すなわち第1回および第2回研修については、当時まだ「第〇回」という名称ではなく、それぞれ「夏季日本語語学研修プログラム」「冬季日本語語学研修プログラム」と呼んでいたため、『紀要』掲載時のままに「夏季」「冬季」という名称を残し再掲している。「第〇回」という名称に統一したのは、第3回以降である。

## 第1回 平成17年度夏季日本語学研修プログラムの報告（1）

ロン・リム

### プログラム起案への背景

留学生センターの業務の一つは国際交流をはかることである。平成16年12月の上旬に韓国の4大学から24名の学生が来校したことを機に、夏季語学研修プログラムを通して、これらの韓国人学生と交流を深められればと考えた。はじめての試みなので、今後も学生が来てくれるような設定を考えなければならない。提携の関係を持っていなくても臨時装置として、平成16年12月の上旬にもっとも多く派遣してくれた南ソウル大学の協力を得ることにした。

プログラムの目的は本学と協定を結んでいる海外の大学との交流を深めると同時に、本学のPRを実施する。実際にやってみると、募集要項と違ってきた点が数箇所あった。まず、13人の募集に対し、結局17人が来た。すべての提携大学に募集要項を送付したところ、反応があったのは4大学だけだった。まず中国の河北医科大学から多数の学生を派遣したいが、学生の日本語力は初級に過ぎず受け入れることが出来なかった。次はバングラデシュのダッカ大学からだった。その学生は日本語が全然出来ず、しかも奨学金がほしいと要求した。三校目は韓国の清州大学からだった。清州大学に韓国語の夏季プログラムの宣伝だけで、こちらへ学生を派遣することはなかった。四校目は韓国海洋大学から2名の学生は関心があった。南ソウル大学の先生は24か25名の学生が参加したいと言ってきた。15名までに削減したが、それでも多すぎるため、さらに11名まで削るように依頼した。しかし、プログラム開始一週間前に15人全員と引率する先生が東京へ行くことはもう決めたので、15人は一旦香川大学に来て、「余分」の4名は愛媛大学か広島大学かへ行くという連絡をもらった。再検討の結果、15名を受けすることにした。また、15名の内、一人は都合が悪くなって来られなくなったため、代わりに別の学生の参加を要求した。我々は断ったが、当日その一名の学生は来てしまったので最後に引き受けることにした。最終人数は南ソウル大学15名と韓国海洋大学2名で17名となった。

課外活動については週末に二回に分けて、4つの課外活動を実施した。最初の行き先は金毘羅宮と金丸座だった。次に直島へ行って、三つ目の活動は高松東ライオンズクラブによる牟礼町でのお茶会である。最後の課外活動は東かがわ市の引田町である。行き先は大学からかなりの距離があって、交通費が高すぎると学生は言っていた。

短期間滞在する留学生にとって、宿泊を確保するのは簡単な作業ではない。本大学では、留学生専用の寮はあるが、これは正規留学生対象となっており、短期留学生には対象外である。従って、幸町会館という宿泊施設を利用しようとすることにした。大部屋と個室で十三名分のスペースを確保したが、韓国の学生は料金がやや高いと言い、ホームステイを希望した。急ぎょホームステイに協力出来る家庭を探した。九名の学生は日本人学生、主にICES香川大学異文化交流会の部員にホストされ、残りの八名は一般家庭、つまり高松東ライオンズクラブと仏生山国際交流会のメンバーにホストされた。ICES部員の下宿に泊まっていた韓国人学生の宿泊料は無料で、大学までの距離も近い。殆ど全員が自転車で通っていた。韓国人学生たちはホストと同年代のため、時に一緒に料理を



作ったりして、外食をしたりして、気楽に滞在出来たと報告を聞いていた。一件だけ、ペットの関係で、部屋を変更すること以外、問題は無かった。

一般家庭に泊まっていた韓国学生たちは一泊につき1000円を払った。理由は、ホストファミリーが毎日の朝食を提供し、時には夕食やお茶とケーキもサービスするからである。ホストファミリーは留学生を連れて観光やショッピングをしたケースもあった。留学生にとっては大学までの距離が難点であると言っていた。タバコやペットの関係でホストと学生との再調整は一件あった。

保険加入に関しては韓国の学生たちに出国する前に旅行保険に加入するように要請した。本センターは念のためもう一度センター経費で加入した。プログラム期間中、二件の病気や怪我があり、保険で処理して特に問題はなかった。

最終日に終了式やインタビューを行った後、サヨナラパーティーを開催した。終了インタビューで多くの学生はホームステイの貴重な経験やホストファミリーの方々に感謝の気持ちを呈した。サヨナラパーティーで、ホストファミリーが感想を言うと、終了インタビューと同様に多くの人は感動していた。

この研修プログラムは第一回の試みではあったが、大きな失敗もなく終了することが出来た。センターのスタッフだけでは当然不十分で、プログラムの無事終了は日本人学生サークル ICES と高松東ライオンズクラブと仏生山国際交流会のご協力は極めて大きいと実感している。

我々センターのスタッフにとって、重要なスキルアップの手段として有意義なプログラムであった。第二回に向けよりよいプログラムを計画・実施する所存である。

これからの課題は以下のとおりである。スタッフ及び関係者の協力を頂きながらより充実としたプログラムを実現したいと考えている。

1. プログラム中、研修生の安全を守り続ける。特に学外見学の際、交通のルールに従うように指導したい。
2. 研修生がより来やすいように条件を再考したい。例えば、宿泊料金について、大学の非常勤教員用の宿泊を使用しているが、現行の宿泊料金は国内の教員向きの設定である。大学の留学生インタナショナルハウスの料金設定を参考にして、改めて研修生向きの宿泊料金設定が出来るように検討したい。なお、一般の宿泊施設では、団体割引や延泊割引、学生割引などの制度があり、大学内も同じような仕組みを見直す必要はあろうかと思われる。また、使用条件、特に部屋数の増加や大部屋の使い方（昼間の荷物撤去）について考えていきたい。
3. 研修生と本学の学生との交流を拡大したい。双方の交流によって、本学の宣伝効果にもなるし、また、研修生は帰国した後、再び本学に正規の留学生として入学することを働きかけたい。
4. 欧米の大学との協定は特に一方的に日本人学生が留学しに行くが、先方からの学生は留学しに来ないのが一般的な常識となっている。現在、アジアの国々から学生を呼びかけているが、将来、協定している欧米の大学からの学生呼びかけも視野に入れたい。

## 第1回 夏季日本語学研修プログラム報告（2）

塩井実香

本学留学生センターも今年度で設立3年目を迎え、ますますの国際交流を推進すべく、業務拡大の一環として、短期の語学研修プログラムを実施する運びとなった。

平成16年夏に、夏季日本語学研修プログラムとして、韓国より受講生を向かえて2週間の研修を行った。プログラム起案への背景および実施に至る経緯については、別項（3ページ）に記したとおりである。

以下に、実施目的、研修内容等を記す。

### 1. 本研修の実施目的

外国人学生に日本語教育を提供し、また、日本、特に香川県の歴史や文化を紹介するとともに、外国人学生と香川大学の学生および地域社会の方々との交流を図ることを目的とする。

### 2. 受講生

韓国南ソウル大学校より15名

（いずれも外国語学部日本語専攻。2年生6名、3年生4名、4年生5名。15名中、男性4名、女性11名。）

韓国海洋大学校（※）より2名

（国際学部英語英文学科4年生の女性と、電波精報通信学部精通信学科4年生の男性。ともに、日本語は独学で習得。）

※海洋大学校は、本学の交流協定校。

### 3. 研修期間

平成17年（2005年）6月27日（月）から7月9日（土）までの2週間

### 4. 研修会場

(1) 講義：香川大学研究交流棟

(2) 学外実習：金毘羅宮、金丸座（旧金毘羅大芝居）、引田町（香川県西部にある、古い町並みを残す町）

### 5. 研修内容

(1) 講義（月～木曜日）

「読解、聴解、会話、作文」の各授業では“読む、聞く、話す、書く”の4技能に焦点を当て、「演習」授業では、日本映画の鑑賞や、修了式でのスピーチのための原稿作成を行った。

(2) 学外見学（金曜日）

交通機関を利用し、香川県内にある文化施設等を見学。

### 6. 研修日程

6月27日（月）…午前：受付、開講式、ガイダンス、施設案内、本学日本人学生との昼食会  
午後：授業

28日（火）～30日（木）…午前・午後ともに授業

- 7月1日(金)…学外実習（金毘羅宮および金丸座の見学）  
 2日(土)…（※ライオンズクラブ主催によるお茶会および庵治散策）  
 3日(日)…（※本学学生団体「ICES(香川大学異文化交流会)」 「KUFSA(香川大学留学生会)」  
 主催による直島見学ツアーに参加。）  
 4日(月)～7日(木)…午前・午後ともに授業  
 8日(金)…学外実習（引田町並み見学）  
 （※見学終了後、ライオンズクラブ主催のパーティーに参加）  
 9日(土)…研修体験発表会、修了式、送別ランチパーティー

## 7. 時間割

曜日 時限	月	火	水	木	金
I (8:50～10:20)	会話※ (長田)	会話 (長田)	演習 (高水)	演習 (高水)	学 外 実 習
II (10:30～12:00)	聴解※ (長田)	聴解 (長田)	読解 (ロン)	演習 (塩井)	
III (13:00～14:30)	読解 (広嶋)	読解 (ロン)	作文 (和田)	作文 (石井)	
IV (14:40～16:10)	聴解 (広嶋)	演習 (塩井)	会話 (和田)	読解 (石井)	

※1週目の月曜午前中は開講式等実施のため、月曜午前の「会話」「聴解」は2週目のみ実施。

### 夏季日本語語学研修プログラム 時間割

#### 《受講生について》

受講生公募の際、条件として「日本語主専攻または副専攻」の学生で、日本語能力は「中級以上」と指定していたが、実際受け入れた中には、日本語を専攻していない学生や、中級と言うには若干厳しい学生もいた。しかし、皆、日本語や日本文化に大変興味があり、積極的に学び吸収しようと努めていたため、日本語能力等が研修自体に影響を及ぼすことはさほどなかったように思われる。

#### 《研修内容・時間割について》

講義においては、通常の授業形態に加え、いくつかのコマを用いて、プロジェクトワーク的な活動も行った。これは、数人ずつのグループに分かれ、日本人に聞きたいことについてテーマと質問項目を決め、実際に外へ出て日本人（今回の場合は、キャンパス内にいる本学学生）にインタビューを行い、その結果をまとめて発表する、というものである。当初は戸惑い気味だった受講生も、自分の日本語が通じ、多くの回答を得、その成果を無事発表できたということで、大きな自信につながったようであるし、また、この作業を通じて、受講生同士の絆も深まったように思われる。短期の研修では費やせる時間に限りがあるものの、このような実践的な活動は、今後もできる限り取り入れていきたいと考えている。

なお、時間割の組み方についてであるが、本学の通常の時間割に則り、1コマ90分として組んだのだが、韓国の大学では1コマ50分ということで、時間がたつにつれ、受講生の疲れと集中力の低

下が顕著に見られるようになってきた。これについては、適宜休憩時間をはさむなどして対処したが、今後の検討材料となった。

#### 《ホームステイについて》

結果論ではあるが、今回の研修の売りとも言えるのが、ホームステイだったのではないかと思う。当初の我々スタッフの計画とは異なる形とはなったものの、ボランティアの一般の方々、本学学生の協力を得て、2週間連日ホームステイを受け入れてもらえることとなった。最終日の研修体験発表の際、大部分の受講生が最も印象に残った出来事としてホームステイを取り上げていたことから、ホームステイの体験が、彼らにとって非常に大きな収穫となったことは明らかである。快くご協力いただいた関係各位に、心よりお礼申し上げたい。

#### 《学外実習およびその他の学外行事について》

香川県は日本一小さな県であるが、海の神様で有名な金毘羅宮や、日本最古の歌舞伎の芝居小屋である金丸座など、見学の価値のある場所が多い。今回も、上記4・6で示した数箇所に訪れたのだが、いずれも大学からかなりの距離があったので、短期間に複数箇所訪問するのは多少きつかったかもしれない。移動には、JRや地元の私鉄、フェリーなどを利用した。地下鉄に慣れているソウルの学生たちには、珍しい体験となったのではないだろうか。

学外実習として、金毘羅宮では、全員ではなかったにしろ、785段の石段をのぼって本宮にお参りした。金丸座は、外壁工事中につき外観が見られなかったのは残念だが、内部をゆっくりと見学することができた。引田町では、地域ボランティアの協力も得て、今では珍しくなった古い日本の町並みを感じることができた。

その他の行事としては、ボランティアのお茶の先生によるお茶会を経験したり、映画「世界の中心で、愛をさけぶ」のロケ地として有名になった庵治の町を散策したりした。直島見学ツアーでは、天候に恵まれなかったのは残念だが、本学在籍中の多くの他の留学生とも交流でき、現代美術館を訪れたり、海辺ですいか割りを楽しんだりしながら、国籍を超えた交流が生まれた。

いずれも、香川ならではの体験となったのではないだろうか。

#### 《修了体験発表会、送別ランチパーティー》

当初は、事前に準備した原稿をもとに、受講生全員にスピーチをしてもらおうと計画していたのだが、人前でスピーチをするということに対して皆かなりのプレッシャーを感じていたため、予定を変更し、教員によるインタビュー方式をとることにした。授業時間を使って準備させ、添削等の指導も行った原稿を、事前に専任教員全員が目を通して内容を把握しておき、当日は教員3人が交代でインタビュアーを務めた。これにより、各学生のレベルに応じた発話が引き出せ、学生たちの緊張もいくぶんかは和らげることができたものと思う。このインタビュー方式は、当日修了発表を聞きにきてくださったホストファミリーやボランティアの日本人学生にも好評であった。

昼食を兼ねた送別会では、参加いただいたホストファミリーや関係の日本人全員より挨拶をいただくことができ、受講生たちとの本当の家族のような絆や友情がよりいっそう深められ、2週間の研修の締めくくりとして大変感動的な場となった。

## 《今回の成果と今後の検討課題》

上で述べてきたことと若干重複するが、今回の成果と検討課題について述べてみたい。

成果としては、まず、初の試みである本研修が、大きな問題もなく無事終了されたということが挙げられる。これは、非常勤教員・関係学生・ボランティアの方々などによるご協力の賜物でもあり、我々スタッフにとっては今後継続して実施していくための大きな励みとなった。また、ホームステイが好評だったことも、成果と言えよう。ただ、これに関しては、2週間連日ということでホストファミリーにご負担をかけることも多かったため、今後ホームステイを研修にどう組み込んでいくかは検討課題である。

その他の検討課題としては、全般的なことについては別項にもまとめられているので、ここでは授業および学外実習に限定して述べたい。

授業に関しては、やはり1コマ何分にするかという設定の問題が大きい。2週間という本研修の性格からしても、連日朝から晩までみっちり勉強する、というよりは、適度に勉強し、あとは実際に日本語を使って日本社会・日本文化に触れる体験をしたほうが、得るものは大きいと思われる。遠路移動の疲れもあろうし、集中して取り組める時間設定と内容設定を再考したい。

学外実習に関しては、本センターが本プログラムのために設けた実習（金曜実施のもの）と、ボランティア団体等による任意参加の行事（主に週末）の区別が明確でなく、よって、当日の指示等も行き届きにくかったことが、反省材料と言える。実施主体が明確でないということは、何らかの必要料金が発生した際も、事前徴収の受講料に含まれているのかいないのか、といった点で受講生の疑問や不満を招きかねない。お金が絡むことは特に、慎重に準備・実施しなければならない。

初めての試みということで、やはりいくらかは問題点もあったが、総じて次回につながる良い成果が得られたのではと自負している。後日談として、この研修を通じて知り合った韓国人学生と日本人学生が、その後今度は韓国で再開し、さらに交流を深めているという嬉しい情報もあった。わずか2週間とはいえ、直に日本を感じ、日本を知った受講生たちが、将来正規の留学生として再度香川に来てくれること、また、彼らを通じて日本や香川について知った学友たちが、願わくば留学という形で訪れてくれること、そして、本学日本人学生も、積極的に韓国はじめ海外へ出て、ますます国際交流の輪が広がり、深まっていくことを心から願っている。そのためにも、我々センタースタッフは、今後より充実した研修プログラムを考え、実施していかなければならない。



## 第2回 冬季日本語学研修プログラム報告(1)

高 水 徹

夏季に引き続き、冬季もこの日本語語学研修プログラムを行うことになった。2006年2月に、前回同様2週間の日程で研修が行われた。

### 1. 本研修の実施目的

外国人学生に日本語教育を提供し、また、日本、特に香川県の歴史や文化を紹介するとともに、外国人学生と香川大学の学生および地域社会の方々との交流を図ることを目的とする。

### 2. 受講生

計13名で、内訳は以下の通り。

韓国南ソウル大学(2006年3月に協定締結)より2名

韓国海洋大学(協定大学)より1名

台湾南台科技大学より10名

韓国海洋大学からの学生は土木工学が専攻だった。その他は、日本語を専攻する学生である。男女比は、前回とは異なり男性が多く7名で、女性が6名だった。

### 3. 研修期間

2006年2月6日(月)から2月18日(土)までの2週間

### 4. 研修会場

講 義：香川大学研究交流棟

学外実習：別項を参照

### 5. 研修日程

前回は週末に学外実習を行うよう日程を組んだが、今回は週末にはホームステイを行うことにした(宿泊については別項参照)。したがって、学外実習は平日に計4回行うこととし、基本的には火曜日と木曜日の午後に実施した。諸事情により一部変更があったため、具体的日程は以下の通りとなった。

2月6日(月)	開講式、ガイダンス、顔合わせランチ、授業	2月14日(火)	授業および学外実習
2月7日(火)	授業および学外実習	2月15日(水)	授業および学外実習
2月8日(水)	授業	2月16日(木)	授業
2月9日(木)	授業および学外実習	2月17日(金)	授業
2月10日(金)	授業	2月18日(土)	発表会、修了式、送別ランチパーティー
2月11日(土)~13日(月)	ホームステイ		

### 6. 研修内容

「読解」「聴解」「会話」「作文」に加え、学習した日本語の実践・応用に主眼をおいた「実習」と、自己紹介カードの作成や最終日の発表および冊子のための原稿(作文)作成を行う「総合」の時間を設けた。

学外実習は、前回同様、香川県内にある文化施設等を見学した。今回は主に徒歩での移動となった。

## 7. 時間割

	2月6日	2月7日	2月8日	2月9日	2月10日
10:00~10:50		会話 長田	実習 ロン	読解 高水	作文 塩井
11:00~11:50		会話 長田	実習 ロン	読解 高水	作文 塩井
13:00~13:50	総合 塩井	学外実習	聴解 高水	学外実習	実習 ロン
14:00~14:50	総合 塩井		聴解 高水		実習 ロン

	2月13日	2月14日	2月15日	2月16日	2月17日
10:00~10:50	授業なし	会話 長田	実習 ロン	聴解 高水	総合 塩井
11:00~11:50		会話 長田	実習 ロン	聴解 高水	総合 塩井
13:00~13:50		学外実習	学外実習	総合 高水	実習 ロン
14:00~4:50				総合 高水	実習 ロン

## 8. 気づいた点等

### 《受講生について》

前回同様、「日本語主専攻または副専攻」で、日本語能力は「中級以上」の学生を募集したが、1名を除き日本語学科の学生が参加した。やはりこのような募集方法では、ある程度の語学レベル差は避けにくいようであるが、積極的にこのプログラムに参加するだけあり、日本語や日本文化に対する興味は強かった。

日本文化への興味という点では、前回の参加者が日本の現代的側面、特にポップカルチャーに強い関心をもっていたのに対し、今回の参加者は日本の歴史的側面や、神社、仏閣などに比較的強い関心をもっていた。さらに、専門分野に関連するもの（瀬戸大橋）をホームステイ中に何度も見に行った学生もいた。

### 《研修内容・時間割について》

前回の研修においては、1コマの時間が長いという点、また、総学習時間数が長いという点の指摘が多かったため、上記のような時間設定とした。つまり、1コマを50分とし、総コマ数を減らした。その結果、前回のように「学生が疲労している」という事態は防ぐことができた。別項で述べられる宿泊の問題により、眠そうな学生が皆無だったわけではないのだが、それでも前回とは大きな差があった。

内容的には、前回のようなプロジェクトワークは実施できなかったものの、会話の時間にビジター・セッションを行うことができた（日本人参加者が会話に参加する形で行われた）。読解、聴解等の時間には、主に時事問題が扱われたが、多くの学生にとっては、やや難易度が高かったようである。

発表会用の原稿作成には、授業で学んだ表現を利用する学生も多く、学習効果が表われていたようである。

### 《発表会および送別ランチパーティーについて》

発表会も、前回の教訓を元にインタビュー形式で行った。その結果、ほとんどの学生は、原稿をそのまま読むという方法に頼らず、質問に答えることができた。一部、受け答えが心許ない学生もいたが、インタビューの担当教員が概ね学生の意図するところを引き出していたと言えるだろう。

もちろん、このような形式で行っても、学生が緊張しないわけではないが、貴重な体験として、また思い出として有意義なものであったと信じている。

なお、今回もホストファミリーや多数の日本人学生がこの発表会に来場してくださった。さらに、直接今回の研修に関わっていないアイパルの職員にもご来場いただき、好評だったことは望外の喜びである。

このインタビューの内容は「総合」の時間に作成し、教員が添削した原稿に基づくが、その原稿は冊子としてまとめ、参加者である学生やホストファミリー等に配布した。これも多くの方にお褒めいただいた。

送別ランチパーティーでは、ホストファミリー等からお言葉をいただくことができた。多くの方から、またホームステイを受け入れたいというコメントをいただくことができ、大変ありがたく思っている。前回同様、ここでも日本人学生との交流を深めることができた。

### 《今回の成果と今後の検討課題》

授業の長さおよびコマ数は、短期間の語学研修としては今回程度が妥当であると思われる。これより長いと、学外実習等の時間が減少してしまうし、これより短いと、語学研修としては不十分であろう。今回の時間設定は、前回の反省に基づいたものである。

授業内容に関しては、会話的なものを増やして欲しいという要望があった。読解、聴解等をなくしてしまうのは、語学研修としては望ましくないかもしれないが、会話の比率を上げることは十分に検討に値する。少なくとも現時点では次回の研修で会話の比率を上げる予定である。一方で、学生の側に目を向けると、読解や聴解においては、説明を聞こうとする姿勢を強く感じ、読んだ内容を口頭で説明する作業等は、あまり慣れていないようだった。作文については、苦手意識をもつ学生が多かったが、研修により、だいぶ意識が変わったようで、研修前より自由に書けるようになったようである。学習した具体的な表現も、最終発表に役立っていたようだ。

授業の難易度については、学生の個人差もあり、設定が難しいが、もう少し易しくしてもいいようである。内容と合わせて検討したい。一部の学生にとっては、特別難しくないものだったようなので、バランスも考慮しなければならない。

今回、学生の作文等を冊子として参加者に配布したが、これは今後も継続して行っていく予定である。本人および今回の関係者にとっての成果・思い出となるばかりでなく、今後、この研修が口コミ等で広まることの一助となることも期待される。

これらの課題や改善すべき点を、宿泊や学外実習の課題等とあわせて検討し、このプログラムをよりよいものとしていきたい。将来的には、海外における留学フェア等の本学の広報活動においても、この研修が利用できればと考えている。



## 第2回 冬季日本語学研修プログラム報告（2）

ロン・リム

### 宿泊

第1回のプログラムと比べ、大きな「改善」の一つは宿泊施設である。前回は全員の留学生在が全行程の2週間にわたりホームステイをしたが、今回は大学の敷地内にある教職員用の宿泊施設「幸町会館」を使った。

部屋の定員制限のため、募集人数は15名だった。最初韓国から4名、そして台湾から10名、合計14名が来る予定だったが、韓国人の1名の学生は都合により辞退することになった。内訳は、女子は6名、男子は7名である。

幸町会館で使用可能な部屋数は個室七つと大部屋二つである。6名の女子学生に個室を割り当て、一つの大部屋は韓国男子学生3名が使い、もう一つの大部屋は台湾男子学生4名に使用してもらった。お風呂は一つしかないので予め入浴する時間を指定してお互いに調整してもらっていた。台所では簡単な軽食しか調理できないので、基本的に大学の食堂あるいは大学近辺の店で食事を取る。

宿泊所は教室まで徒歩5分、第1回のホームステイと比べ、今回は留学生在が遠い所から通わなくてよいという大きな利点があると考えられる。さらに、同じ屋根の下で長期宿泊をすることによって学生同士が仲良く出来る。最初韓国人学生と台湾人学生はお互いにコミュニケーションが取れなかったが、段々取れるようになって仲良くしていた。

我々スタッフの立場から見ても、留学生たちを「見守り」易い利点もある。万が一留学生に問題や事件が起こってもスタッフはすぐ助けに行くことが出来る。また、留学生にとって我々が指定する集合場所に短時間ではほぼ間違いなく集まってくれるメリットもある。そしてアイセスと言う日本人学生のサークルにとっても留学生たちと会いやすい条件であった。

宿泊施設に対して学生の反応は、初日から「個室は広くて大変よい。」と言ってくれた。大部屋もよいと言ってくれたが、プログラムの後半に入ると、早寝組と遅寝組が出現してやはり想像した通り少々の不満が出た。遅寝組は幸町会館では、門限がなく、大満足して、部屋の中でゲームをしたり遊んだりおしゃべりをしたりしていた。しかし隣の大部屋の早寝する学生は邪魔される。当然苦情を言ってくる。次に、幸町会館は1981年に建設されたため、施設の老朽化は進んでいる。学生によると、部屋のヒーターはうるさくて寝られない夜もあった。また、複数の学生は「お風呂は一つだけ、しかもやや狭くて使いにくい。」と言う不満を言った。「最後の人は可愛そう。夜中の2時から3時まで待つ。」ということも耳にした。

お互いあまり馴染みのない人と一緒に集団生活をするのは簡単なことではない。夜中、誰かが話し出したら、他の人は起される。そして、13人の男女が一つのお風呂を使用するのもいい条件とは

言えない。とは言え、学生たちは2週間の集団生活を無事にしてくれたことは本当によかったと思う。

しかし、学生の意見を参考にして出来る限り、宿泊施設利用の改善を尽くしてみたい。夜の騒音やお風呂の事情を考慮して、まず、人数はさらに制限する。同時に、幸町会館にある全ての九つの個室（二つの特別室と七つの個室）の使用と二つの大部屋を使わせてもらいたい。改正する定員は個室に9名と各大部屋に1名ずつ、合計11名の学生を今後受け入れたいと考えている。大部屋に多人数を入れると「うるさくて寝られない」と言う苦情を減らすためだ。また、お風呂は一つしかない、しかも狭いと言う苦情もあるため、第2回の15名定員よりさらに減らし、第3回は最大11名の定員としたい。また、ヒーターによる騒音に関しては、大学にお願いして修理をしてもらいたい。

### ホームステイ

平日授業がある時、大学内の宿泊施設に泊ると確かに便利である。しかし、もし週末も幸町会館に泊ると留学生はおそらく「面白くない」と言うだろう。第1回のプログラムと同じように我々はやはりホームステイという「セールスポイント」を研修プログラムに盛り込みたい。しかし前回と違って、2週間連日のホームステイではなく、週末だけを利用して実施する。今回のホームステイは3泊4日に設定した。前回と同じように学生から1日1千円を徴収してホストファミリーに「謝礼」の形として差し上げた。1週間前に、ホストファミリーと会合を開いて受け入れの詳細を話した。対面式は2月10日(金)の夕方に行われた。ホストファミリーは学生と4日間一緒に行動をして、月曜日のよい時間に幸町会館へ学生を戻してくれた。学生たちの作文にはホストファミリーとの数々のエピソードについて多く書かれていた。お蔭様で全員の学生がこの経験について、大満足したと書いていた。多数のホストファミリーが学生の発表会や修了式、サヨナラランチパーティーに参加してくれた。勝手な解釈かも知れないが、これはホストファミリーの皆さんも「留学生を受け入れてよかった」という気持ちの表れであろう。研修プログラムが続く限り、今後ともホストファミリーを始め、本学の教職員や高松市民のご協力を引き続きお願いして、ホームステイを行いたい。

### 学外実習

今回は4回の学外実習を行った。第1回は2月7日(火)に栗林公園の見学を実施した。昼休み後、センターのスタッフは留学生と一緒に栗林公園へ歩いて行った。公園内の案内はボランティアガイドの方がしてくれた。箱松や鶴亀松を観察した後、掬月亭でお茶会を楽しんだ。数名の学生はお茶会の際、正座していて足がしびれたと言った。雛人形を見て、公園内でもっとも美しい池の景色を満喫した。

第2回の学外実習は9日(木)に行われた。まず、歴史博物館で香川県の自然歴史などを学んだ。1名の男子学生と1名の女子学生が武士時代の鎧と十二単の着物をそれぞれ試着して写真撮影をした。博物館を後にして、玉藻公園の見学をした。4名のボランティアガイドが案内をしてくれた。ボランティアの皆さんは時間をかけて披雲閣や天守閣跡、内苑御庭の説明を丁寧にしてくれた。引き続き高松サンポートへ移動した。残念ながら、他の団体が予約していたため、最高階の展望台へ上がることは出来なかった。

第3回の学外実習は15日(水)に実施した。最初の目的地は香川県庁の展望台だった。高松サンポートで高所から見られなかった市内風景をここで見る事が出来た。「栗林公園はどこ?」「香川大学はあちらです!」という会話が飛びかった。見学後、香川県国際交流の場として知られるアイパル香川のお茶会に参加した。栗林公園の掬月亭でのお茶会と違って、茶道の先生がきめ細かく茶道の歴史や流派、お茶の点て方などを説明してくれた。お菓子やお茶を頂いた後、留学生たちは実際にお茶を点てる体験をした。アイパルを後にして、隣接の香川県文化会館へ移動した。画廊を見て見学を終了した。

最終回の学外学習は大学のマイクロバスで移動して穴吹工務店のアメニティデザインラボで実施した。光、風、水、空気、音と熱を考察し、環境を守ると同時に資源の有効利用、そしてより快適な住宅やマンション作りを研究しているのを見学した。施設内に展示している数々の建設素材に興味をもつ学生たちが多くいた。2箇所目は産業技術総合研究所四国センターで、お米を醗酵させた入浴剤や自然に返還できる蟹・海老の甲羅から製造するプラスチック製品など健康を維持する自然素材の医療科学技術の研究を見学した。3箇所目は本学の工学部を訪れた。ある研究室で大学院生が窓拭きロボットの操作を披露してくれた。他に犬のロボットや荷物運搬用ロボットの研究の説明もしてくれた。また、工学部長を始めロボット研究室の教員と学生と一緒にお茶を飲みながら歓談した。最後に工学部の最高階の部屋から見た高松市の景色を楽しんで見学を終了した。

学外学習に対する反応は、学生は専門性が高すぎて説明された内容は難しく理解しにくいというコメントがあった。また、殆どの行き先へ徒歩で行ったのも学生たちに指摘された。そして、ある学生は教室内での授業より、学外学習の方がよいと言った。回数をもっと増やしてほしいと学生は要望した。

前回のプログラムの学外実習では、遠いところへよく行った(金毘羅さん、引田町、直島など)のと違い、今回の行き先は高松市内の近場の施設ばかりを選んだ。これは確かに実施しやすい。しかも交通費は発生しないメリットもある。しかし、今回は学生が殆ど徒歩で目的地へ移動したため、「毎日疲れている。」という学生もいた。将来、出来る限り、大学のマイクロバスの利用を考えたい。見学施設に関しては、専門性が低く、難しくない、いわゆるもっと一般的なしかも分かりやすい内容のある見学を思案したい。例を上げれば、下水処理場の見学である。実習回数については、回数を増やすことは少々難しいだろう。週に2回実施すれば適切だと考えている。



## 第3回日本語語学研修プログラム報告

高 水 徹

### 1. 本研修の実施目的

外国人学生に日本語教育を提供し、併せて日本、特に香川の歴史や文化を紹介すると共に、日本人及び地域社会との交流を図ることを目的とする。

### 2. 受講生

○韓国南ソウル大学校より1名

(日本語専攻の1年生、女性)

○韓国大邱大学校より5名

(日本語専攻は1名のみ。その他は会計、経営、教育、工学。1年生1名、2年生2名。4年生2名。男性は1名のみ、4名女性。)

以上2大学は、いずれも本学の交流協定校である。

### 3. 研修期間

平成18(2006)年6月26日(月)から7月8日(土)までの2週間

### 4. 研修会場

講 義：香川大学研究交流棟

学外実習：栗林公園、香川県下水道公社、三谷製糖羽根さぬき本舗、歴史博物館、玉藻公園

### 5. 研修日程

前回同様、週2回の学外実習を午後に行い、1週目と2週目の間の週末にホームステイを行う形式とした。具体的には以下の通りである。この他、プログラム外ではあるが、ICES/KUFSA 主催の日帰り旅行(小豆島)へも参加した(7月2日に実施された)。

6月26日(月) 開講式、ガイダンス、昼食会、授業	7月4日(火) 授業および学外実習
6月27日(火) 授業および学外実習	7月5日(水) 授業
6月28日(水) 授業	7月6日(木) 授業および学外実習
6月29日(木) 授業および学外実習	7月7日(金) 授業
6月30日(金) 授業	7月8日(土) 発表会、修了式、送別ランチパーティー
6月30日(金)～7月3日(月) ホームステイ	

### 6. 研修内容

研修は、「会話」「聴解」「読解」に加えて、このプログラムの最終日の発表の元になる文章を作成する「作文」、学習した日本語の実践・応用に主眼をおいた「実習」、自己紹介カードや本プログラムに関する冊子作成を行う「総合」によって構成される。前回までは作文も一部「総合」に含めていたが、今回はそれをやめた。

学外実習は県内の庭園、文化施設、地場産業の見学などである。

## 7. 時間割

	6月26日(月)	6月27日(火)	6月28日(水)	6月29日(木)	6月30日(金)
10:00~10:50		実習(ロン)	会話(塩井)	実習(ロン)	聴解(広嶋)
11:00~11:50		実習(ロン)	会話(塩井)	実習(ロン)	聴解(広嶋)
13:00~13:50	総合(高水)		読解(高水)		会話(塩井)
14:00~14:50	総合(高水)		読解(高水)		会話(塩井)
	7月3日(月)	7月4日(火)	7月5日(水)	7月6日(木)	7月7日(金)
10:00~10:50		読解(塩井)	実習(ロン)	作文(高水)	聴解(広嶋)
11:00~11:50		読解(塩井)	実習(ロン)	作文(高水)	聴解(広嶋)
13:00~13:50			作文(塩井)		総合(高水)
14:00~14:50			作文(塩井)		総合(高水)

## 8. 気づいた点等

### 《受講生について》

前回までと同様、日本語専攻または副専攻の学生を募集したにもかかわらず、日本語学習歴のほとんどない（またはかなり不足している）3名の学生が参加することになった。他の3名は本プログラムが想定しているレベルにほぼ達していた。ただし、比較的日本語力の高い3名のうち1名も十分とは言えない状態だった。

語学力が不足している学生が実習自体に興味・関心をもっていなかったわけではない。むしろ、参加姿勢は積極的だったと言ってよい。しかしながら、語学力の差はどうすることもできず、授業は比較的日本語力のある3名の協力なしでは成立しなかった。

前回までは日本語専攻以外の学生でもある程度の日本語力を有していたため、語学力の問題がここまで大きくなることはなかったが、今後は学生の募集については慎重にせざるを得ないだろう。

### 《研修内容・時間割について》

先に述べたような語学力の問題があったため、まず自己紹介カードを書く段階で、一部英語で記入している学生がいた。日本語で記入できる部分を埋めることで必死で、とても英語で記入した部分も日本語で書くよう指示できるような状況ではなかった。教員同士で連絡を取り合い、何とかこれらの学生にも興味を持てるよう、研修内容を調整した。

1コマの時間は前回同様50分とした。今後はこの形式を継続する予定である。

最終的に作成した作文は、比較的日本語力のある学生の協力もあり、我々の予想以上に良いものができた。我々も胸をなでおろした。

学外実習について、語学力の問題を別にしても、今回新たに試した見学場所（下水道公社と和三盆の製造）は本プログラムにはあまりあわなかったようである。積極的に受け入れてくださっても、短期語学研修の外国人学生にとってふさわしい場所であるとは限らない。今後も見学に必要な日本語力と見学内容自体の両面から検討と試行が必要だろう。

以前からの見学場所である、栗林公園、玉藻公園は今回も好評で、学生たちは写真を何枚も撮っていた。

### 《宿泊・ホームステイについて》

今回も宿泊は幸町会館（本学の宿泊施設）を使用することができた。人数が少なかったため、全員個室が利用できた。

週末のホームステイでは、語学力の問題があったにもかかわらず、快く受け入れていただいたことに、心より感謝申し上げたい。やはり今後とも我々のプログラムにとって重要な部分を占めていくと考えられるホームステイを継続していくためにも、学生の募集は適切に行っていく必要がある。

### 《発表会および送別ランチパーティーについて》

ホストファミリーの皆さんや ICES（本学の異文化交流サークル）の学生を招いての発表会とパーティーという形式は前回までと同様だが、今回は市内のレストラン「ミラノのおかず屋さん」を会場とした。この会場設定により、発表会、式、パーティーを順にスムーズに進行させることが可能になったのみならず、雰囲気も和やかになり、おいしい料理を楽しむことができたなど、いろいろな利点があった。今後、特に理由がない限りこの方式を続けていこう。

発表会では語学力の問題で、教員と学生がスムーズなやり取りを行うことができないこともあったが、先に報告したように我々の予想以上の作文ができていたので、無事に終えることができた。

### 《成果と課題》

何度も触れてきたように、語学力の点で大きな問題があったにもかかわらず、本プログラムは無事終了させることができたのは、受講生本人の姿勢だけではなく、他の受講生やホストファミリーの皆様方のご協力によるところが大きい。このようなご協力を得られたことは我々にとって非常にありがたいことだった。また、今まで同様、ICES 等、本学学生のサポートも、受講生の気持ちを安らげていた。

研修後のアンケートでは、授業も含め、好評だった。我々にとってはありがたいことだが、授業そのものの評価というよりも感謝の念を表現してくれたと考える方が妥当だろう。授業の内容や進行の仕方については、特殊な状況だったので今後の参考にはしにくい。宿泊の金額も含め、全体のデザインも良い評価を受けた。受講理由に関して、「日本語を勉強したい」よりも「日本の文化施設等を見学したい」の方が多かったという事実が、今回の受講生の日本語力に反映されていると言ってもいいかもしれない。

今後の学生募集であるが、実際に我々が面接を行うようなことが不可能である以上、日本語専攻または副専攻という条件を厳密に適用していくのが現実的な方法だと考えられる。申請用紙には志望理由の欄を設けているが、残念ながら本人が考えて記入するとは限らない。将来的には参考データとして、日本語学習歴や日本語能力試験に関する欄を設けることも検討したい。



## 第4回日本語語学研修プログラム報告

ロン・リム

平成18年8月に、第4回の日本語語学研修プログラムを実施しました。

### 1. 研修の目的

今回の研修は、本学の医学部と協定を結んでいる中国の河北医科大学のみを対象にしました。従いまして、本研修の実施は河北医科大学との関係を深め、研修生に日本語教育を提供し、日本・香川県 of 歴史や文化を紹介し、中国人学生および地域社会の方々との親睦を図ることを目的とします。

### 2. 研修生

研修生は22名で、全て中国の河北医科大学からでした。女子は16名で、残り6名は男子学生でした。1年生は8名、2年生は9名、3年生は5名でした。研修生の他に、引率者として河北医科大学教員1名が同行して来ました。

### 3. 研修期間

平成18年8月21日から25日までの5日間でした。本来の研修期間は2週間ですが、河北医科大学の希望により短縮となりました。

### 4. 宿泊施設

学内宿泊施設である幸町会館に16名の女子学生と引率者が宿泊し、6名の男子学生は市内の低料金ホテルに泊まりました。研修期間が短かったため、ホームステイを実施出来ませんでした。

### 5. 研修会場

講義：本学の研究交流棟

学外実習：医学部、栗林公園、歴史博物館、玉藻公園

### 6. 研修日程

期間が短いため、また、研修生の日本語レベルを考慮して、講義は3回、学外実習は4回にしました。日程は以下の通りです。

8月21日(月)	開講式、ガイダンス、授業、地域住民との交流会	8月24日(木)	授業、歴史博物館、玉藻公園の見学
8月22日(火)	授業、医学部の見学と懇親会	8月25日(金)	修了式、送別ランチパーティー
8月23日(水)	栗林公園		

### 7. 研修内容

授業の回数が少ないため、「会話」中心にしました。また、「大きな古時計」という歌を通して、単語の発音の練習をしました。



## 8. 時間割

曜日	午前		午後
8月20日(日)	関西国際空港に到着後、高松に移動		高松に到着、幸町会館にチェックイン
8月21日(月)	開講式、オリエンテーション	昼休み	授業(ロン)
8月22日(火)	授業(高水)	昼休み	歴史・文化施設(栗林公園)の見学
8月23日(水)	授業(ロン)	昼休み	医学部・付属病院の見学
8月24日(木)	授業(高水)	昼休み	歴史・文化施設(玉藻公園・歴史博物館)の見学
8月25日(金)	閉講式、ティーパーティー		高松を出発

## 9. 気づいた点等

### 《受講生について》

全員が医学部出身でした。河北医科大学では、9割の学生は英語を第1外国語として選択していると聞いています。残りの学生は、日本語を選択するのが一般的らしいですが、今回研修に来ている学生たちの日本語力は入門のレベルでした。今回の人数は定員オーバーでした。宿泊は幸町会館に収容しきれなかったため、市内の低料金ホテルも併用しました。宿泊は2箇所に分かれ、研修生の面倒を見づらかったこともありました。

### 《研修内容・学外実習について》

研修生の日本語レベルは入門のため、講師は授業を思うように実施しにくかったです。時に授業に引率者の先生が同席して、一々講師と受講生の間に立って中国語に訳したりしていました。教える側から見るとやり難かったのですが単語の発音練習のため、歌を駆使してやりました。このやり方は研修生たちがかなりよろこんで受けてくれました。授業外の注意事項や学外学習に関しては、やはり研修生に情報を伝えるに良かったです。コミュニケーションが十分に取れない状態の中、通訳が必要となりました。幸運にも、日本に滞在中である研修生のお姉さんが遊びに来ていて、栗林・玉藻公園及び歴史博物館の見学の時は、そのお姉さんと引率者の先生と二人で通訳してくれました。医学部の見学は、医学部に在籍中の中国人学生が通訳してくれました。

### 《交流について》

研修期間は夏休み中でしたので、第1回から第3回まで行っていた日本人学生サークルICESとの交流は予定をしませんでした。最後の時、数名のICES部員が研修生と接触をしてくれましたが、今回の研修プログラムは、地域住民との交流を中心にしました。研修の最初の日に国際交流に関わっている団体の方々をお呼びして研修生と交流会をしました。今回のプログラムでは、最終日の作文発表はしなかったです。理由は研修期間が短すぎて作文を書く時間が足りなかったからです。代わりに研修生の代表が簡単なスピーチをした後、全員で「大きな古時計」を合唱しました。地域住民の方々も一緒に歌ってくれました。

### 《最後に》

今回の研修は双方の大学の認識のずれが一番大きなポイントだったと思います。我々の立場から見ると、「日本語語学研修」をしたいのに対して、河北医科大学は「修学旅行」のようにしていました。成果とえば、双方の大学間の絆を強化することは出来たと考えられます。また、研修生と地域住民との交流や親睦も一つの成果と言えます。